

【ご参拝の皆様へ】

仏説無量寿経（大経）についてミニ解説

*本願寺派の聖典では、經典の抜粋部分と宗祖・親鸞聖人著の和讃及び念仏を差し挟みながら読誦することが一般的です。

●經典の特徴

日本の浄土教系が依拠する「浄土三部経」の一つ。釈尊入滅から五百年前後に成立した大乘仏教において二世紀頃の編纂とされる。上巻には阿弥陀仏の本願、浄土の成り立ちを、下巻はその浄土にどのように往生するかを説く。親鸞聖人はこの經典を特に重んじ、「南無阿弥陀仏」（名号）のいわれを表す、浄土真宗の根本經典と位置付けている。

●これを説くために私は生まれてきた

古代インドのマガダ国首都・王舎城の耆闍崛山（ぎしやくつせん）において、釈尊は大勢の修行僧や勝れた菩薩たちを前に、ひとときわ気高く尊い存在感をもって説いた。それは、今こそ自らがこの

世に生まれた意味を明かしたからだろう。

そのただならぬほど生き生きとした姿に感動し、思わず立ち上がりて訳を問うたのが弟子の一人。阿難尊者である。どんな素晴らしい教えを説いても、本当に「教えが聞こえる人」が現れなければ、真実は働きようがない。まことの出会い、言葉を超えたものにふれた時、説法が生きた教えになる。

●阿弥陀仏誕生ヒストリー

ある国の王が世自在王仏の説法を聞いて感激し出家する。法蔵と名乗り、師の徳を心から讃嘆して（讚仏偈）、諸々の仏の世界を見たいと欲する。

二二一億の仏国土より優れた点を選び取り、全ての命を救うと発願（ほつがん）し、途方もない間思惟して四十八通りの誓いを建てる。続けてこれらの願いの目的を述べ重ねて誓う（重誓偈）。

兆載永劫にわたり修行し、選り取った願と行が成就して、法蔵は無量寿仏（阿弥陀仏）と成った。

その仏国土を「安樂」（極樂）と言い、西方に建立されてすでに永い時間が経ち、阿弥陀仏は現にその世界におられる。

經典では、阿弥陀仏の徳と極樂浄土の様子が明らかにされ、衆生は阿弥陀仏の名号を聞信することで往生が定まると説く。また、人の世の悪（三毒五悪）を生々しく示し、弥勒菩薩に対して、衆生にこれらを誡め、仏の大悲心と智慧を信じて迷いの世界を断ち切り浄土往生を勧められる。

最後に、無上功徳の名号「南無阿弥陀仏」を受持することで、将来一切の法が滅しても、この経だけは留めおいて人々を救いつづけると説かれた。

●阿弥陀如来が誓った願いとは？

「設我得仏○○○不取正覚」（たとえわたし・法蔵菩薩が仏になることができても、○○○であるならば、わたしは決して悟りを開かない）という強い意志で誓われた衆生救済の願いのことで、経

典前半に四十八通りに渡って述べられる。

ちなみに第一願は「たとえわたしが仏になることができて、わたしの国に地獄・餓鬼・畜生の三悪道の者がいるとすれば、わたしは決して仏になりません」と述べ、無三悪趣の願と呼ばれる。

私たちの願望は自己中心的なものに対して、全ての仏の願いは衆生に向けられた「利他心」であり、その完成こそが自らの悟りとなる「菩提心」である（「四弘誓願」として各宗旨で使われる）。

●他力本願って人の力をあてにするんか？

それは世間での誤用。「他力」とは阿弥陀仏の救済の働きを指す固有名詞である。仏の願いは真実なるがゆえに求心力が働く。自力の努力精進は道徳的に評価されても、往生の因にはなりえない。

四十八の誓願中、第十八番目が最も重要で「念仏往生の願」「選択本願」などとも呼ばれる。唯一但し書きが付き、さまざま解釈論議されてきた。

（次ページ参照）

「設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法」

(私が仏になるとき、全ての人々が心から信じて、私の国に生れたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないようなら、私は決してさとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗るものだけは除かれます)

「至心信樂」…至心は真実という意味。私たちは、偏り誤ったものの見方しかできないため、本来純粹な心や浄らかな心は一片もない。

また、阿弥陀如来の本願の誓いが真実であることをただ一筋に信じて疑わない心を信樂という。

「欲生我國」…如来の光によっておこされた至心信樂によって、煩惱の身ながら安樂浄土に生まれることに間違いないという心がそなわること。

「乃至十念」…阿弥陀如来の名を称えるにあたり、称える回数や時間に決まりがないことを知らせる

ものと親鸞聖人は領解する。命終時でなく、平生に名号の成り立ちを聞き開くとき、摂めとつて捨てない(摂取不捨)、浄土往生が約束される。

「不取正覺」…私が浄土に往生することができなければ仏にならないと決意された、衆生の往生と阿弥陀仏の成仏が一体という確固な決意である。

「唯除五逆誹謗正法」…五逆とは、父を殺し母を殺し聖者を殺し(ないがしろにし)、仏身を傷つけ、聞法者の和合を乱す、という重大な悪。さらに仏法を謗る罪の重いことを知らせ、それらにくれぐれも気をつけよということを教える(抑止門)。

●還相(げんそう) 回向つてなに？

さらに浄土往生し悟りを得て、そこに安住しているわけではない。第二十二願には、この世に還り来る菩薩となり、縁ある人々を救う活動に入ると誓われ、正信偈には「往還回向由他力」(往くも還るもすべて阿弥陀仏の力による)とうたわれる。

●なぜ南無阿弥陀仏が救いの言葉なの？

念仏はもともと仏を心に念ずること、行としての地位は低かったようだ。浄土教が盛んになると、念は称と同一とみられ、もっぱら阿弥陀仏の救済を信じて「南無阿弥陀仏」と称える称名念仏をさすようになり、中国浄土教の大成者・善導大師は、称名こそ往生への中心的行だと説いた。

サンスクリット語の音写で、ナモはお任せする帰依すること。アミタは無限の寿命と無限の光という二つの意味を持つ。限らない命は慈悲を表し、全てを照らす光は智慧をあらわす。つまり時間と空間に制約を持たない仏だからこそ、どこでもいつでも宗教心を目覚めさせることができる。

日本では、浄土宗の開祖・法然がこれらを受けて、専修（せんじゆ）念仏の教えを広め、親鸞聖人は称名念仏はそのまま阿弥陀仏の呼び声であり、念仏は信心決定に対する報恩行であると大転換をした。

つまり我々衆生は、その功德の込められた六字

名号を「ただいたたく」だけであつて、称えた行為を条件にして助かるという論法は誤りである。

●ブッダ・目覚めた人に私も近づけるのかな？

經典の後半では人間のあさましいほどの苦しみ・悪業が、貪瞋痴（むさぼり、怒り、無知）の三毒の煩惱によつて繰り返される様を強調する。

「**人在世間 愛欲之中 独生独死 独去独来**」「誰もみなそれぞれの行いによつて、苦しい世界や楽しい世界に生まれて行く。みずから之を受け、代わる者は誰もいない」と厳しい教えが続く。

阿弥陀仏は、衆生を救う願いも行の因も往生の果も名号として成就され、私に呼びかけ続けている。娑婆世界の因果・救済の道理に思いがけず眼が開かれ、生涯止まぬ迷いから脱する方向が見えたとき、歓びの心が湧き上がつて古い自我が終わり、私を解き放つ仏の働きに出会っているのだ。

参照「浄土三部経の真実」「浄土真宗への誘い」「浄土三部経現代語訳」他